

## 報告Ⅶ

### 浄土真宗における寺院の意義

龍谷大学教授、本願寺派勸学  
内藤知康

皆様、お疲れのことと思います。今ほどご紹介いただきました内藤でございます。

もともとこのシンポジウムに関しては、桂先生から「この日空いているか、ちょっと考えていることがあるから、空いてるんだったら空けておいてほしい」と言われて、空けておきまして、その後中身がだんだん分かってきたといういきさつで、今日ここに出させていただいたわけでありませう。

内容というものをご説明いただいて、とりあえず思ったことを言ってほしい。本音をそのまま言ってくればといいのだと言っていたいただきました。いま現在の本音ということをおしめすと、疲れたからやめませんかというのが、いま現在の本音であります。司会の先生や皆さんお疲れのようですから、最後のご報告は割愛させていただきますと言っていたくと一番ありがたいわけでございますが、そうは言ってもらえないようでございます。

まず、「日本仏教に未来はあるか」というテーマであります。私の専門は真宗学であって、仏教学ではありません。ですから日本仏教というものを鳥瞰して、日本仏教はどうかということとはできないわけでありませう。その能力も持っておりませうし、当然、そういう資格もない、能力のない者がそういうことを言う資格はないということでもありません。私が学んでおります、研究しておりますのは、あくまでも真宗学、基本的には親鸞教義ということになっているわけでありませう。

これまでさまざまな先生方のご報告を聞かせていただきまして、我が意を得たり、よくぞ言ってくださったということもございませうし、それを聞きつつ、私の報告にも盛り込んだほうがいいのかと思うようなこともございませうし、あるいは親鸞はこうこうこうであったといわれましたが、ちょっと違うのではなからうかというふうに思うこともありませうが、それについて詳しく触れていきますと、いくら時間があっても足りませうから、それは一応、横に置いておくことにいたします。

私は親鸞教義が基本的には専門でありますから、日本仏教の中でも非常に狭いところしか知っていないということになります。つまり逆に、日本仏教を一般論で捉えるということとはできないということになります。しかし一般論というのは、どこか抽象化しているわけであり、抽象化されたものは、私は実は生きていないものではないかと思うわけであり

ます。中国で白馬非馬論という議論もありましたし、あるいは、明治に入りましてからですか、往生浄土というのは仏教の基本的な問題ではない、だから往生浄土の教えというのは必ずしも仏教と言えないのではないかというお話もあったわけであります。

しかし、馬という属性から言いますと、別に白でも黒でも何でもいいのですけれども、ただ、どんな色も持っていない馬というのは存在しないわけです。馬は必ず白い馬か黒い馬か茶色い馬か、必ず色を持っている。生きている以上は何らかの特殊性というものを持っているのが当然だと私は考えます。

そういう意味から申しますと、真宗教義というものは仏教全体でいう普遍的な性格を持っているのは当然なのですが、当然普遍的でない部分も持っているわけで、私はその部分こそが大事なのではないかと、仏教全体に共通していない部分こそが、まさに真宗教義の具体性というものを意味しているのではないかと考えております。

そういう意味で、「浄土真宗における寺院の意義」という題を出させていただきました。なぜこの題を出させていただいたのかと申しますと、仏教に未来があるか、何があれば未来があって、何がなければ未来がないのかということを考えましたときに、単純に考えますと、仏教というのはやはり三宝です。仏法僧の三宝が存在すれば仏教があると言えますし、これが存在しなくなると、やはり仏教はないということになるのではないと思うわけであります。

宗教ということに関しまして、主に宗教学のほうであります。宗教には外的宗教と内的宗教があるという言い方がされています。内的宗教というのは宗教の教義と言うことであり、外的宗教というのはその宗教の儀礼と言われております。儀礼というのは教義の入れ物である。儀礼がなくなってしまうたら宗教というものは滅びていくだけだし、もちろん教義がなくなってしまうと、これはもう宗教と言えないわけでありますが、その儀礼と教義、とりあえずその両方を担っているのが僧侶であります。現在それが、仏法僧の僧ということであろうと一応、考えることができます。

ただ浄土真宗において儀礼が果たしてどういう意味を持っているのかとなりますと、なかなか難しく、特に親鸞の時代、どんな儀礼があったのかと言いますと、せいぜいご本尊の前でお勤めをして法話するぐらいのことではなかったであろうかと思うわけでもありません。そういう意味で寺院というのは、結局、僧の拠点なのです。基本的に寺院というのは僧侶の拠点である一応、考えることができるわけであります。

これは現状を言っているわけです。当然、サンガが成立するために寺院が必須だということも言っているわけではありません。いま現在はそうなっているということも言っているわけであります。当然、別のかたちもありうるのでしょうけれども、現状はやはり寺院というものを拠点として、サンガというものが成立していると一応、考えることができるわけであります。

そのときに寺院の意義付けということが、それはつまり僧というものが今後、存在しう

るかどうかということにもかかわってくるのではないかと思うわけであります。プリントをいろいろ作成したのですけれども、結局、何が言いたいのかと申しますと、ここではそもそも浄土真宗の寺院というのは、念仏者の集会所としての道場が寺院に発展したのだと言いたいわけであります。

これはよく言われることなのですけれども、やはりこういうところで報告するわけですから、きちんと根拠を押さえたほうがいいたろうということで出しておきましたのが、これが根拠です。まず、最初、覚如の『改邪鈔』、道場の意義ということでありますけれども、ここでは覚如は、寺院を建てるというようなことは阿弥陀の本願にはないことなから、一向専修の行人は、そういう寺院を建てるということは企ててはならないとっております。しかし、大谷廟堂の寺院化をひたすら進めた覚如がこういうことを言うのはどうということなのかという気もするのですけれども、とりあえずこうっております。

ですから、「ただ道場をばすこし人屋に差別あらせ」、つまり普通の家とは若干違うようにしている、そういう道場というものをつくるのだと最初にはこうっております。

あるいは同じ『改邪鈔』でありますけれども、これも同じように「道場となづけてこれをかまへ、本尊を安置したてまつるにてこそあれ、これは行者集会のためなり」と、みんなが集まるためのものなのだと示しております。そして、集まるのに遠い、近いという違いがあって、近い者は来やすいけれども、遠いものは来にくい。そういう状況になったときには遠くにまたそういう道場をつくるということが基本であって、いくつも並べてつくるようなものではないのだということが『改邪鈔』の第12条に示されております。

その念仏者の集まりということが、これはいったいどういうことかということではありますが、これは親鸞の手紙の中に、下から4行目です。聖人、法然のことですが、「聖人の二十五日の御念仏も、詮ずるところは、かやうの邪見のものをたすけん料にこそ、申しあはせたまへと申すことにて候へば」とあり、ここで「二十五日の御念仏」という言葉が出てきます。法然の命日を縁として、念仏の集会が開かれている、これは親鸞が亡くなりましてからは親鸞の命日に合わせて行なわれるようになったと言われていたわけであります。

人々が集まるための場所があればいいのであり、そもそも特別の寺院というものは、浄土真宗にはなかったのだと一応、考えられるわけです。

それから道場から寺院へという変化が見られます。現在の真宗寺院の基本形というのは、内陣にある上壇と下壇の外陣というものに分かれております。内陣は中央に本尊が安置されています。出仏壇という言い方がされますが、後ろも通れる仏壇です。中央に仏壇が出てきています。宮殿という言い方をいたします。扉で閉めることができるのが厨子であって、ずっと開いているものが宮殿だということのようであります。

そしてその両側に宗祖や歴代宗主の画像を安置し、さらに内陣の左右に余間がある。これは一つの基本形です。多くはそうありますが、そうでない寺院ももちろんあるわけであります。

古い形を留めている道場と言われます、その内容というものは、外側に喚鐘をつるして  
いるけれども、外観は一般民家とほとんど異なることはないといわれています。

内部は奥のほうで床を少し高くして上壇とし、下壇と分けてはいるが、その区画には民  
家と同様に襖（ふすま）が用いられている。現在の寺院ではいわゆる巻障子とかたち  
で柱を障子で巻くことができるかたちの障子で、いわゆる内陣と外陣は区切られているわ  
けですけれども、そうではなくて襖です。

下壇の間は、同行である村民が集合する外陣であるから広くとってある。炉も切っ  
てあり、また食事を調える場所も設けてあります。

上壇には内陣があり、後壁の中央には方便法身尊像（まれに木仏）、その左右には名号  
をかけて安置する。ただし、この名号というのが蓮如の時代の名号ですから、本来は名号  
が中央に安置されていたのであろう、時代の変化によって変えられたのだらうと言われ  
ております。

ここまで、③のところまでは宮崎圓遵先生の『真宗における道場と寺院』というもの  
によっているわけですが、宮崎先生はそういう見解を出しておられます。

内陣は板敷きであるが、左右に襖で区切った小室があります。1年に1、2度巡回してく  
る所属寺の僧侶の休息所や宿泊所にあてられていて、これが余間とかたちになってくる  
わけです。

永正の頃の真宗の建築の様態を伝える寺院というのは、外陣は左右7間、現代の一般真宗  
寺院の構造と変わるところはない、内陣は3間、奥行2間、その両側に襖で区切られた2間ず  
つの余間がある、内陣と左余間は外陣よりほんの少しだけ高いが、右余間は平等で同じ高  
さだということです。木仏や親鸞画像の安置には宮殿や厨子を用いているが、後壁にそっ  
て一直線に置かれている。つまり、いわゆる出仏壇とかたちにはなっていないという  
わけです。後ろの壁に沿って置かれているようであります。内陣に畳を敷きつめているが、  
右余間が外陣と平等であることとともに、原始的な道場の面影を残しているのであろう。  
これが宮崎先生の見解であります。

3番目、道場の寺院化や新寺造立の条件というのは千葉先生の書物によったわけですが、  
本願寺の第13代良如宗主は、同行百余人なきものは寺号を許さないと断っております。

やはりここには、基本的には同行の集会所だという理念がずっと伝えられてきていると  
考えることができます。そういう意味で念仏者の集会所としての道場が寺院になったので  
すから、寺院の本来の意義というのは念仏者の集会所である、それは念仏者を育成する場  
所なのだ、つまり修行のための場所ではないというところに一つ真宗寺院の特徴というも  
のがあると考えられます。聞法の間であるという言い方もされます。ですから、人々が法  
を聞く場所としての外陣が広く取ってある。これが真宗寺院の基本的な形だと考えられま  
す。

そこから考えますと、浄土真宗の未来の有無というものは結局のところ、念仏者のもの。

つまり念仏者がこれからもずっと出てくるようであれば、浄土真宗に当然、未来はあるということですけれども、念仏者が出てこなくなると、浄土真宗にはもはや未来はないのだとしか言いようがない、こういうことだと思われます。

そういう意味で何が大事なのかということで、教学の充実ということこそがいちばん大事なのではないかということでもあります。私は実は、教学という言葉と教義という言葉とを区別して用いております。教義というのは、これは親<sup>■</sup>によって組織化、体系化された浄土真宗の教義ということであり、教学というのは、その教義というものがどういうものであるかということをも明確にしていく作業です。

教学ですから、学はある意味、人間の営みであります。教義というものは何もかも百パーセント完全に明らかになっているわけではないわけでありますので、当然、資料がないことによって諸説紛々というような、そういう問題もないわけではありません。そういう問題に関して、できるだけそれを明らかにしていこうという行ない、営みが一つ教化ということでもあります。

もう一つは教学というものは、明らかになった教義に即して、現実に存在するさまざまな問題に対してどのように対応していくべきか、これを明らかにすることも教学であります。と同時に当然、教義内容というものをどのように具体的にまた表現していくのか。表現の仕方というのは当然、時代によって違います。

教義内容のある意味いちばん完全な表現ということ、これは『教行信証』だとしか言いようがないわけでありますけれども、当然、それを現代の人々がそれをそのまま読んでスッと意味が分かるというわけではありませんから、それを分かるようなかたちで、あるいは部分的に、あるいは全体的に明らかにしていく、これが教学である。そういう教学を充実するというところこそが、やはりいちばん重要なのではないかと考えるわけであります。

充実であって、決して変容ではありません。時代によって変えていくわけではないです。いちばん基本的なところは教義、これは時代、社会が変わろうと全く変化しないとして考えることができるわけですが、ただ、それを具体的に現代社会にどのように明らかにしていくのかということになってくると、それはやはり時代性というものを、あるいは社会性というものは当然、考えていく必要はございます。

蓮如はこういうことを言っているわけで、「一宗の繁昌と申すは、人のおほくあつまり、威のおほきなることにてはなく候ふ。一人なりとも、人の信をとるが、一宗の繁昌に候ふ」。まさに先ほど申しましたように、念仏者の存在ということこそが浄土真宗の未来ということにかかわってくるのだということでもあります。

現代思想との対応、つまり教学の充実ということを考えましたときには、現代思想との対応ということが当然、必要になってまいります。

例えば成仏、あるいは阿弥陀仏ということについて、ここから西方に十万億の仏土を過ぎたところに仏土があり、極楽と名づけられる。そこに阿弥陀仏という仏がおられ、その

阿弥陀仏という仏は、今からはるか昔、世自在王仏という仏が出現したときに1人の国王が、その世自在王仏の説法に感銘を受けて、自らの国を捨て、王の位も捨てて出家をして、そして世自在王仏の弟子となり、四十八の願いを起し、その願いを完成して阿弥陀仏となったのだと、まさに経典に説かれていることですが、この通りに現代人に話して、果たして受け入れてくれるだろうか。おそらく無理であろうと思います。

やはり、これはどういう意味があるのかということ、それなりに少なくとも現代人の感性に合うような言い方でこれを表現し直すということも当然、必要だということになるかと思えます。

ある意味その営みの一つとして、本願寺派の勸学寮から出ました、『今、浄土を考える』という書物があるわけですが、浄土真宗において、浄土教において非常に重要な概念である浄土ということについて、どう考えるべきなのかと、それが一つ非常に大事な問題だということでもあります。

いろいろと先輩の書物などを読んでおりますと、よく出てくる言葉ですが、「凡情を遮せず」という言葉が非常によく出てまいります。「凡情（ぼんじょう）」とは、凡夫の「凡」と感情の「情」です。「遮せず」ですから、遮らない。浄土真宗の教えというものは凡夫の情というものを遮らないのだということです。

そういう意味から申しますと、例えば西方の浄土という世界におきましても、私たちがそもそも小学校、中学校から学んできた、いわゆる天文学の知識から言うならば、ずっと西のほうへ行ったところに阿弥陀仏の浄土があるなんてことは基本的にはあり得ない話であるわけです。

しかし、果たして私たちにとって、それが本当の世界観なのかということも考えないといけないわけで、つまり地球は丸くて、1日に1回、回転している。まさに小学校の頃から学んできたことであるわけですが、私たちは本当にそのように受け止めているのかどうかとなりますと、実際はそうは受け止めていないのではないかと、ただ単に知識としてはそういうことを知ってはいるけれども、毎日の生活はそう受け止めて生活していないのではなかろうかということでもあります。

これは例えば新聞の天気予報ですか、天気図のところを見ますと、本日の日の出、何時何分、日の入り、何時何分と書いてあります。おかしいですね。日の出、日の入りと別に太陽が出てくるわけではないです。地球が回っていったから見えるようになったというだけです。それが日の出、日の入りという言葉が普通に使われている。そのことを聞いて、何の違和感も感じない。

つまり私たちの感覚は、やはりお日様は東から出てきて、西へ沈んでいくのだという感覚で受け止めている。そういう感覚に対して阿弥陀仏の浄土というのは西にあると言われているのであって、決して地球儀をぐるぐる回して、お浄土を探そうという意味ではないのだというようなところも明確にしていく必要があるということでもあります。

先ほど申しましたように、念仏者の有無にかかっている、つまり寺院というものは念仏者を育成する場所だと申し上げましたけれども、一方ではこういうこともあるわけです。お名前は出しませんが、幕末から明治にかけて大和上と言われた真宗学の偉い方がおられて、その方が亡くなられる時に、後継ぎの方が「安心して浄土へ行ってくれ。あとは私たちが念仏繁昌のために頑張るから」と言いましたところで、「念仏というのは自然に広まるものじゃ。お前は邪魔せんようにしろ」という言葉が返ってきたという話があります。

確かに真宗の教義からしますと、基本的に法というものは本願力の働きによって広まるものであって、私たちはそれを邪魔しさえしなければいいのだ。これは確かにそうなのですけれども、ただ、何が邪魔になるかというところが難しいのです。邪魔しなければいいということでは、では何もしないのがいいのかというと、何もしないことが邪魔をしているということになる場合も当然あるわけでありまして。

具体的などころで一つ、二つ考えてみますと、少なくとも浄土真宗の僧侶、これが例えば後ろ指さされるようなことをしましたときには、個人的な問題としてはなかなか受け止めてもらえない。浄土真宗のお坊さんはみんなあんなものだと、うっかりするとなったりいたします。まだ、それで済めばいいのですけれども、だから浄土真宗の教えはだめなのだとなってくると、まさにその人の行ないが念仏を広めていくということの邪魔をしたということになるわけです。

具体的にどういうことが邪魔をすることになるのかは、やはり一人ひとりが考えていかなくてはいけない問題だとも思うわけでありまして、念仏というものが自然に広がっていきます。『唯信鈔文意』の中で親鸞が解説しております十方世界、十方の世界にあまねく広まる、これが名号のそもそもの働きなのだということ踏まえての話であるわけですが、これは私が念仏を広めているのだというと、うっかりしますと傲慢さにつながっていきます。そういう傲慢さというもの、ある意味、浄土真宗の人間観ということを考えましたときには、傲慢さというものがいちばん強く批判されるべき姿勢ではないかと思うわけでありまして。

うっかりいたしますと念仏が自然に広まるという言い方をしますと、あなた任せで自分は何もしなくていいのだみたいな受け止め方も出てくるわけでありましてけれども、一生懸命努力することが実は邪魔をしないということにもつながっていくというふうにも受け止めていくことができるわけでございます。

一応、お時間がまいりましたようですので、私のお話とさせていただきます。

1, 道場の意義

①、おほよそ造像起塔等は、弥陀の本願にあらざる所行なり。これによりて一向専修の行人、これを企つべきにあらず。されば祖師聖人御在世のむかし、ねんごろに一流を面授口決したてまつる御門弟達、堂舎を営作するひとなかりき。ただ道場をばすこし人屋に差別あらせて、小棟をあげて造るべきよしまで御諷諫ありけり。中古よりこのかた、御遺訓にとほざかるひとびとの世となりて造寺土木の企てにおよぶ条、仰せに違するいたり、なげきおもふところなり。

(『改邪鈔』第9条)

②、道場となづけてこれをかまへ、本尊を安置したてまつるにてこそあれ、これは行者集会のためなり。一道場に來集せんたぐひ、遠近ことなれば、來臨の便宜不同ならんとき、一所をしめてもことのわづらひありぬべからんには、あまたところにも道場をかまふべし。しからざらんにおいては、町のうち、さかひのあひだに、面々各々にこれをかまへてなんの要かあらん。あやまつてことしげくなりなば、その失ありぬべきものか。そのゆゑは、「同一念仏無別道故」なれば、同行はたがひに四海のうちみな兄弟のむつびをなすべきにかくのごとく簡別隔略せば、おのおの確執のもとゑ、我慢の先相たるべきをや。

(『同』第12条)

③、これにつけても御身の料はいま定まらせたまひたり。念仏を御こころにいれてつねに申して、念仏そしらんひとびと、この世・のちの世までのことを、いのりあはせたまふべく候ふ。御身どもの料は、御念仏はいまはなにかはせさせたまふべき。ただひがうたる世のひとびとをいのり、弥陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはば、仏の御恩を報じまゐらせたまふになり候ふべし。よくよく御こころにいれて申しあはせたまふべく候ふ。聖人(法然)の二十五日の御念仏も、詮ずるところは、かやうの邪見のものをたすけん料にこそ、申しあはせたまへと申すことにて候へば、よくよく念仏そしらんひとをたすかれとおぼしめして、念仏しあはせたまふべく候ふ。(性信宛消息)

2, 道場から寺院へ

①、現在の真宗寺院の基本形

- i、内陣のある上壇と下壇の外陣とに別れている。
- ii、内陣は、中央に本尊(多く出仏壇)を、その両側に宗祖や門主の画像を安置し、さらに内陣の左右に余間がある。

②、古い形を留めている道場

- i、外側に喚鐘をつるしているが、外観は一般民家とほとんど異なることはない。
- ii、内部は、奥の方で床を少し高くして上壇とし、下壇と分けているが、その区画には民家と同様の襖が用いてあって、一般寺院のような巻障子ではない。
- iii、下壇の間は、同行である村民が集まる外陣であるから広くとっており、炉も切っており、また食事を調える場所も設けている。



iv、上壇には内陣があり、後壁の中央には方便法身尊像（まれに木仏）、その左右に名号をかけて安置する。

v、内陣は板敷きであるが、左右に襖で区切った小室があり、1年に1・2度巡回してくる所属寺の僧侶の休息所や宿泊所にあてられている。

③、永正（1516～、実如の晩年）頃の真宗の建築の様態を伝える寺院

i、外陣は左右7間、現代の一般真宗寺院の構造とかわるところはない。

ii、内陣は3間、奥行2間、その両側に襖で区切られた2間ずつの余間がある。

iii、内陣と左余間は外陣よりほんの少しだけ高いが、右余間は平等である。

iv、木仏や親鸞画像の安置には宮殿や厨子を用いているが、後壁にそって一直線におかれている。

v、内陣に畳を敷きつめているが、右余間が外陣と平等であることとともに、原始的な道場の面影を残しているのであろう。

以上、宮崎圓遵「真宗における道場と寺院」による

3、道場の寺院化や新寺造立の条件

本願寺第13代良如宗主は、同行百余人なきものは寺号を許さないとした。

（千葉乗隆『真宗教団の組織と制度』による）

まとめ

念仏者の集会所としての道場→寺院

寺院の本来の意義は念仏者の集会所であり、念仏者を育成する場所である。

→聞法の間

浄土真宗の未来の有無は念仏者の有無にかかっている。

→教学の充実

現代思想との対応

一宗の繁昌と申すは、人のおほくあつまり、威のおほきなることにてはなく候ふ。一人なりとも、人の信をとるが、一宗の繁昌に候ふ。

（『蓮如上人御一代記聞書』末121条）